

平成30年6月25日(月)

老球の細道421号

サッカーWカップとバスケットボール

会津バスケットボール協会 室井 富 仁

日本バスケットボールはワールドカップ出場アジア予選全敗で現在に至る。残された試合はオーストラリア、チャイニーズ・タイペイとの2試合。これによって、ワールドカップ(元世界選手権大会)出場のみならず、東京五輪出場の有無までが決まる。W杯サッカーを見ながら、日本のバスケットボール行く末に思いを寄せてみた。

1・サッカーW杯と五輪

国際サッカー連盟は国際大会の最高をW杯と位置づけている。五輪は「23歳以下」の大会でオーバーエイジ枠を3人までで、その枠を使うか使わないかは自由である。ちなみに女子のW杯は年齢制限がなく、W杯も五輪も同じ位置づけのようだ。

五輪はかつてアマチュアの大会だった。プロに解禁されるようになって五輪を低く見る考えは変わらなかった。バスケットボールもバルセロナ五輪以降はNBAのプロ選手が出場して最高レベルになってきたが、最近はシーズンオフに行われる五輪を、疲労回復、ケガのリスク回避で出場を辞退する選手も増えてきた。今後、NBAのスーパースター達はワールドカップと五輪、そしてNBAリーグ戦のどれを重視して参加するのだろうか。

2・今大会の注目(球爺室井の独断と偏見)

*アイスランドの活躍:北大西洋に浮かぶ島国で人口が35万人の小国が列強ひしめく欧州予選を勝ち抜いた。しかも1回戦優勝候補のアルゼンチンと1-1の引き分けを演じた。この試合の視聴率は99.7%だという。郡山市くらいの人口の国がW杯に出場できるのだから、1億人の日本がバスケットボールW杯に出場できないわけがない。小国がなぜ国際的な成功を収めたか。幼い時から優秀な指導者に指導を受けられる環境が整っている。だから上達が早く、楽しいし、続ける意欲が高い。人口が少ないから、レベルに応じて最高の指導が全員に保障されているという。小国のハンディがプラスになっている。

*VAR(ビデオ・アシスタント・レフリー)の導入:紳士協定、ジェントルマン精神で運営してきた英国生まれのサッカーの歴史と伝統。あれだけ広いピッチを基本的に1人の審判で裁いてきた。バスケットボールは多民族国家アメリカ生まれが故に狭いコートの中に3人もの審判が裁く。色々なスポーツが誤審をなくすためビデオ判定を導入。サッカーW杯だけがアンチ・ビデオ判定の聖域だったが、世の中の流れには逆らえなかった。人間の判定と機械の判定をどのように折り合いをつけていくのだろうか。

*日本代表の「北風と太陽」:本大会を2か月前にして指揮官を変えた日本サッカー代表チーム。前任のハリルホジッチは厳しく管理指導をしてきたために選手とのコミュニケーションが悪化し解任。後任の西野氏は選手の自主性を重んじる指導。監督交代の影響が懸念されたが、1昨日「ロシアの小さな奇跡」を起こしコロンビアを2-1で撃退。

今までのW杯はジーコ等自主性を重んじた監督のもとではすべて予選リーグ敗退だったという。球技のチームスポーツは「コーチナビリティ」(コーチによるチームケミストリー)が大きい。前任のハリルホジッチが笑うのか泣くのか楽しみである。

異分野の知恵を借りて停滞を破る。NBAのシーズンも終了し、異分野のもう一つの世界最高レベルの大会に注目して、新たな発想とモチベーションを求めたい。